

---

# 【VOCALOID】初音ミクの再建 ～ネギ煎餅の北斗製菓を救え～

ピーナッツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【VOCALOID】初音ミクの再建　　ネギ煎餅の北斗製菓を救え

### 【Nコード】

N5332BA

### 【作者名】

ピーナッツ

### 【あらすじ】

アホみたいなタイトルですが、本当にタイトル通りのお話です。結構面白いです。自信あります。

「あれ？ ネギ煎餅今日も無い…っていうか置場無くなってるじゃない、どうなってんのよ!？」

今日はミク、レン、リンの三人で、ジャスコ札幌店へ買物に来ている。

ミクがルカに買物を頼まれたのだが、レンとリンも暇なのでついて来たのだ。

午前十時。開店したばかりなので、まだ客はまばらだ。

衣料館 電気館と回って、ミクがいつも立ち寄る北海道特産品のコーナーへ来た。

目当ては北斗製菓のネギ煎餅<sup>せんべい</sup>だ。

斜めにスライスしたネギを練りこんで焼き上げた煎餅で、ネギの産地北斗市の名物である。

直径10センチほどの煎餅はとても薄く、練りこまれたネギは表面に浮き出ている。青々と鮮やかで、まるで押し花のようだ。

パリパリとした食感を楽しんでいると、煎餅とは思えないほど豊かなネギの香りが広がっていく。

ミクのようなネギ好きにはたまらない逸品である。

それが、無い。

先週も買いに来たのだが、その時は売り切れと言われた。

今日はいつもの置場すら無くなっている。ミクは店員のおばさんを呼び止めて聞いた。

「ネギ煎餅ですか。製造元が倒産したらしいんですよ。美味しかったですけどねえ」

「ええ!？」

ミクは『家が家事です』とでも言われたかのごとく驚いた。

「ミ、ミク姉、そんなにショック受けなくても…。ネギを使ったお菓子ならほかにもあるし…」

レンが慰めるが、呆然としているミクの耳には届いていないようだ。額に斜線が入っている。

「あ、あの…大丈夫ですか…」

心配そうな店員の声でミクはハッと我に帰った。バッグから携帯を取り出し、素早くボタンを操作する。

ネットで北斗製菓の電話番号を検索すると、すぐに通話ボタンを押した。八回目のコールで相手が出た。

『お待ちせしましたあ、北斗製菓です』

声からして年配の女性だ。土地の訛りがあり、おっとりした感じだ。

「あの、倒産したって聞いたんですけど、本当ですか?」

ミクがいきなり本題を聞く。

『すみませんねえ。ご迷惑をお掛けします。経営上の理由で行き詰ってしましまして、工場を置くことになりました。小売店の方でし  
ようか?』

「いいえ、ネギ煎餅が好きなだけです」

『まあ、それはそれは。せっかくご愛顧いただいたのに、申し訳ございませんねえ。わたくし共も残念なんですけど、どうにもできませんで…』

人の良さそうな口調で申し訳なさそうに謝る。ミクはそれ以上問いただすこともできず、電話を切った。

石川啄木の短歌のように、閉じた携帯をじっと見つめている。

「…ミ、ミク姉、あきらめなよ。お菓子なんかよりさ、食品館で本物のネギ買って帰ろうよ」

見かねたリンがそう言うのと、ミクは何かを決意したようにキッと前を向いた。

ルカに頼まれた買物リストのメモをバッグから取り出す。

「リン、買物お願い。レンはあたしと北斗製菓へ行くわよ！」

リンの手にメモを握らせると、レンの手を引いて早足で歩き出す。リンは呆然としてその場に残された。

「ミ、ミク姉！ 手痛いって！ マ、マジで行くの！？」

店の前で客待ちしているタクシーに二人で乗り込む。

「丘珠空港まで、急いで！」

ミクの切迫した声に押されて、タクシーの運転手が急発進する。

「お、おかだま空港？ どこだよそれ？」

新千歳空港と函館空港しか知らないレンが聞く。

「チャーターヘリがあるのよ」

「へ、ヘリで行くの！？」

レンと話しながらも、ミクはまた携帯で何やら調べている。

「あなた北斗市ってどこにあるか知ってるの？ 函館の隣よ。札幌からだと特急でも四時間かかるのよ。あ、運転手さん、途中で北洋銀行があつたら寄ってください」

ミクは敵に追われているジームス・ボンドみたいな顔になっている。何を言っても聞きそうにない。

「い、幾らかかるのさ？ 高いんでしょ、ヘリって？」

「二、三十万ありゃ足りるでしょ。あ、もしもし、北海道航空ですか？ ヘリ空いてます？」

チャーターヘリの会社に電話しているようだ。もうレンには止めることができない。

途中で銀行に寄り、ミクは北洋銀行の名前が入った紙袋を持ってタクシーに戻ってきた。

…食パンでも入っていきそうな大きさだけど、まさか現金じゃないよな…。  
…銀行ってよくティッシュやタオルくれるからな、そうだ、それに違う…。

レンはミクに何も聞かず、そう思うことにした。

ジャスコを出てからわずか四十分で、ミクとレンは北斗市の上空に差しかかった。  
ビルや車がオモチャのように見える高度を、ヘリは時速220キロで飛行する。

「北斗市役所の近くにヤダマ電気があるはずよ！ 北斗製菓はその後ろにあるの！ 探して！」

ローター音に負けないように、ミクが大きな声で操縦士に指示する。

「お、お客さん、シートベルト外さないで、座っててください！  
右前方がヤダマ電気です！ でもどうするんですか！？ 降りることはできませんよ！」

操縦士も大声で返す。

「何で降りれないのよ！ ヤダマの駐車場だっ広いじゃない！」

「法律で、ヘリポート以外に降りるには事前に許可取らなきゃダメなんです！ 緊急時でもない限りね！」

「緊急時ならいいのね！」

ミクの言葉にレンは青くなった。

ミクは大きく息を吸い込むと、音量を制御するダイナミクスパラメータ全開で叫び声を上げた。

「キイイイ

！……！」

「わあ……！」

レンは堪らず耳を押さえた。操縦士はヘルメットをかぶっているの  
で、耳を塞ぐこともできず悲鳴を上げている。

「どつか故障したとかいくらでも言い訳できるでしょ！　すぐに降りないと、気絶するまで叫ぶわよ！」

「そ、そんな無茶な……」

ミクがまた叫び声を上げる。高度計のガラスカバーにピシッとひびが入った。

「わ、分かった！　降りるからやめてくれー……！」

突然駐車場に降り立ったヘリコプターを、ヤダマ電気の買い物客が遠巻きに取り囲んでいる。

ミクは紙袋から百万円の札束を一つ取り出すと、封を切って大体で半分に分け、朦朧としている操縦士に渡した。



「お釣りはいいから」

ハッチを開け一メートルほどの高さからひらりと飛び降りる。  
ミクの超音波でふらついているレンも、後に続いてよろめきながら  
飛び降りた。

ざわつく人々の間を抜け、二人は北斗製菓へと急いだ。

ヤダマ電気の裏手にある北斗製菓の工場は、看板も見落としそうな  
ほどこじんまりとしていた。

コンクリート建てで築年数はそれほど古くなさそうだが、住宅と工  
場が一緒になっている。

一階の三分の二が工場、一階の残りと二階が住居のようだ。住居と  
しては立派な方だが、工場としては零細の部類に入る。

工場用の出入り口と住居用の出入り口が別になっている。ミクは工  
場用の出入り口に向かった。

アルミの格子戸の向こうは、四畳半ほどの事務所になっているよう  
だ。呼び鈴もないのでミクは軽くノックして戸を開いた。

小さなカウンターの向こうに、事務机が二つ。電話に出たと思われ  
る女性と、同じくらいの年代の男性が座っていた。

戸を開ける音で二人は顔を上げた。机の上にはたくさんの伝票やら  
書類やらが積み重なっている。

工場を閉めるに当たっての手続きに追われているのだろう。

「いらっしやいませ。どちら様で…」

女性の方が声をかける。電話と同じ穏やかな声だ。

「初めまして、初音ミクといいます。先ほどお電話を…」

そういうと女性は嬉しそうに微笑んだ。

「あらまあ、わざわざいらして下さったんですか。あなた、さつき電話をくれたお嬢さんよ。どうしましょう、事務所にはテーブルもありませんから、どうぞ自宅の方へ…」

面識もないというのに、ミクとレンは自宅のリビングに通された。自己紹介されて、男性が社長兼工場長の鶴田正道さん、女性は妻で事務の幸子さんと分かった。

ミクたちも自己紹介する。歌手なのだといった。

「ほう、歌手をされてらっしゃる。どうりで派手な髪の色をされているわけですね。お似合いです」

ミクやレンのような子供相手にもちゃんと敬語で話す。夫人同様温和な人柄らしい。

幸子夫人がお茶とネギ煎餅を持ってきた。ミクの眼が餌を狙う猫の眼になる。

「どうぞ召し上がってください。在庫は残りわずかなので、これが最後になるでしょう」

ミクが手を伸ばし、煎餅を一枚取る。パリッと音を立てて齧ると、香ばしいネギの香りが鼻腔を抜けていく。

「美味しい…。あたし、このお煎餅大好きなんです…」

「お嬢さん、美味しそうに食べなさるねえ。このネギは北斗産の…」

「『元蔵』ですよね」

ミクが先回りしてネギの品種を言った。社長が驚きの表情を浮かべる。

「一番作付面積が大きいのは『白羽一本太』ですけど、見た目の良い白羽より元蔵の方が、太くて香りが強いのでお煎餅に合っていると思います。よく研究されたのでしょうか？　こんなに丹精込めて作ったお煎餅なのに、どうして工場を閉めてしまうんですか？」

レンはびっくりした。ネギ好きなのは知っていたが、ここまで詳しいとは思わなかった。

鶴田社長も感心している。

「いやあ、お見せしました。お嬢さん、あなた只者ではありませんせんね。おっしゃるとおり、これは私の半生をつぎ込んで作った、大切な煎餅です。私もできれば工場を続けたいんですが、ここらへんが引き際かと…」

鶴田社長の話はこうだった。

半年ほど前に煎餅を焼く機械の調子が悪くなり、銀行から金を借りて新しいものに更新することにした。

しかし、新しい機械も入り、これからという時に、出荷の大部分を取り扱っていた問屋が突然倒産してしまった。

手形の返済期限が迫っているが、資金繰りに行き詰まってしまった。金を借りれる親類縁者もなく、工場を閉めることにしたのだ。

「じゃあ、資金繰りさえどうにかなれば、工場は続けられるんです

ね？」

そうもいكانのですよ、と鶴田社長は言った。

「機械の寿命つてのはだいたい同じくらいなもんですから、練り機とか包装機とかも最近調子が悪くなつてゐるんです。それに、後を継いでくれると思つていた長男も、何を思つたかミュージシャンになるつて家を飛び出してしまひ、後継者もおらんのです。今回の危機を乗り切つても、いずれ設備更新のため借金しなくてはならないし、私もいつまで丈夫でいられるか分かりません。今工場を畳んでしまつた方が、人様の迷惑にならないんじゃないかと……」

鶴田社長は寂しそうな表情を浮かべた。ネギ煎餅を愛しているのは、誰よりも社長自身だろう。考え抜いたすえの、苦渋の決断に違いない。

ミクにもそれは分かるのだが、こうして目の前に煎餅があると、もう食べられなくなつてしまうことにどうしても納得がいかない。

「後を継がれるはずだつたご長男は、お煎餅作りに携わつたことはあるんですか？」

「ええ、工学系の専門学校を卒業してから、三年ばかり工場を手伝つておつたのですが、若気のいたりですかねえ。ギターを買つたり、パソコンで音楽を作り出して。あいつは子供の頃から音痴だし、とても才能があるとは思えません。あなたの方がよくご存知でしょうが、芸能界つてのは、生半可な才能でやってけるようなところじゃないんでしょう？」

そうですね、とミクは答えた。

ミクには三万曲の持ち歌があり、千人近い楽曲提供者がいる。しか

し、メジャーでCDを出せるのは、ほんの一握りだ。

「ご事情はよく分かりました。でも、ネギ煎餅が消えてしまうのは耐えられません。あたしにお手伝いをさせてください。不渡りになりそうな手形って、幾らなんですか？」

鶴田社長は困惑した顔をした。

「300万円ですが、初音さん、あなた歌手をなさってると言っても、そんな大金……」

ミクは紙袋から札束を鷲づかみにして取り出すと、テーブルの上にドサツと置いた。

ひい、ふう、みいと数える。ちょうど十束あった。

「他にも買わなきゃならない機械があるんでしょう？ とりあえず1000万お貸しします。全部で2000万持って来てますから、必要ならおっしゃってください」

鶴田社長と幸子夫人は目を丸くした。レンはあごが外れたように口をあぐり開いている。

CDやDVDの売りに伴う印税には、作詞・作曲者に支払われる印税の他に歌唱印税というのがあって、レコード会社やカラオケチェーンからは毎月相当額がミクたちに支払われている。

ミクたちはあまり贅沢をしないので、その金は預金口座に積み積もってとつくに億を越えている。

リンとレンはまだ自分達で口座を自由にさせてもらっていないので、その額すらよく知らない。

「は、初音さん…あなた、こんな大金…。いけません、今日出会ったばかりのお方から、こんな大金はお借りできません」

喉から手が出るほど欲しい金だろうが、鶴田社長は毅然と断った。男気がある。ミクはますます鶴田社長が好きになった。

「あたしは三年前から毎日のようにネギ煎餅を食べています。あたしにとって北斗製菓は、昨日今日知った会社じゃないんです。こんな美味しいお煎餅を途絶えさせてはいけません。後継者のことを気にされていましたか、それはあたしが何とかできると思います」

鶴田社長の目がすつと細くなった。

「正史を何とかできると…。初音さん、あなた歌手をされているとおっしゃったが、正史をご存知なのですか？」

「正史さんというお名前なのです。息子さんのことは何も知りません。でも、ミュージシャンをあきらめさせることはできると思います。もし本当に才能がないのなら…」

ミクは真っ直ぐに彼の目を見つめた。

鶴田社長は考えた。今日あったばかりの年端もいかない娘が、私の会社を救おうと言っている。

普通なら冗談かペテンかどちらだろう。しかし、目の前の少女は、疑いもなく真剣そのものである。

煎餅をかじっている初音さんの表情は、本当に美味しそうだった。こんなにネギ煎餅を愛してくれている人がある。それに報いることができれば、私の半生は何だったというのか。

「…初音さん、ありがとう。あなたを信じます。このお金は、ありがたく借りさせていただきました。たとえ会社が立ち行かなくなっても、このお金だけは必ず返します。正史のことを、よろしく願います…」

ミクと鶴田社長、幸子夫人は固い握手を交わし、工場を後にした。社長と夫人はミクとレンの姿が見えなくなるまで、何度も頭を下げ、手を振っていた。

「ミク姉、いいの？ あんな大金貸しちゃって？」

大通りでタクシーを待ちながら、レンが聞いた。

「大丈夫よ。鶴田社長、いい人だったでしょ」

「いい人だとは思っけどさ…。ていうか、どうすんだよ、正史さんのこと。あんな安請け合いしちゃって、説得できなかつたら鶴田社長に何て言うのさ？」

口を尖らしてレンは言った。空車のタクシーにミクが手を上げる。

「説得なんてしないわよ。ちゃんと考えてるんだから、心配しないで」

二人が向かった先は、正史の住むアパートだ。住所は鶴田社長から聞いた。

ぼろっちくて、いかにも売れないミュージシャンが住み着きそうなアパートだった。

社長から聞いた部屋番号は203号室。窓も開いていないし、下から見上げているだけでは居るのか居ないのかも分からない。

すると、若い男がミクたちの横をすり抜けて、アパートの階段を登って行った。

金色に染めた長い髪と、ラフなのか汚らしいのか判別に苦しむ服装。いかにも「音楽やってます」的なでたちの男は、ポケットから鍵を取り出すと203号室に入っていた。

「あれが正史ね…。お手並み拝見といくわよ」

ミクはバッグから携帯と接続コードを取り出すと、ヘッドセットにつないだ。

「…ミク姉、何する気…？」

不安そうな顔でレンが聞く。ミクは答えない。

「ミク姉…！ ハッキングする気！？ ダメだよ！ クリプトンに止められてるでしょ！」

青い顔をしてレンが叫び、ミクの腕を揺さぶる。それでもミクは目を閉じ、携帯を通じてネットにアクセスする。

クリプトン社のボーカロイドに歌ってもらうには三つの方法がある。一つはソフトを買って、パソコン上で歌ってもらう方法。一般のユーザーがそれだ。

二つ目は、ボーカロイドを家やスタジオに呼んで歌ってもらう方法。これは札幌近郊に住んでいる有名Pだけに許されている。



三つ目は、ネットを通じてボーカロイドをパソコンに呼び出し、歌ってもらう方法。これは主に北海道以外の都府県に住んでいる有名Pが利用している。

三つ目の方法を可能にするため、ボーカロイドのヘッドセットにはネットにアクセスする機能が付いており、思念による操作で自由にネットの世界を行き来できる。

実はこれを悪用すると、高度なハッキングが可能なのだ。そのためボーカロイドを発売している各社は、ハッキングに対し厳しい禁止令を布いている。

悪質な場合は電腦をフォーマットする規定になっているが、危険を冒してまでハッキングしようとするボーカロイドはおらず、未だその例はない。

心配そうに見守るレンをよそに、ミクは目を閉じてバーチャルの世界を泳いでいる。

十五分ほど経ってから、ミクは目を開けた。

「…ミク姉、やばすぎるよ…。クリプトンにばれたらどうすんのさ…」

「足跡残すようなヘマはしないわよ。正史Pは鶴田社長の言う通りね、全然才能無いわ」

接続コードを巻き取りながらミクは言った。

「DTMやってるようだけど、ソフトに遊ばれてるだけね。音楽理論が分かってないのよ。センスもからつきし。パソコンにボカロは

入ってなかったわ。動画に投稿したことが無いから、叩かれたことも無いのよ」

パソコンに入っていたソフトやMP3ファイルをチェックしたらしい。

携帯を開くと、また電話をかける。

「もしもし、佐々木さんですか？ ミクです。いつもお世話になってます。ちょっとお願いがあるんですけど…」

クリプトンの初音ミク開発担当者、佐々木渉氏に電話しているようだ。

「今から言う住所に、あたしのソフトと入門書をセットで送ってください。懸賞が何かに当たったことにしてもらえますか？ 本人が『応募した覚えが無い』とか連絡してきたら、『誰かがあなたの名前で応募したのでしょう。賞品はそのままもらっていいです』と答えてください」

レンは、はーんという顔をした。携帯から佐々木氏の当惑した声が漏れ聞こえる。

「ちょっと込み入った話なんで、札幌に帰ってから詳しく話しますね。え、ここですか？ 北斗市です」

早めにお願ひしますよ、と念を押してミクは電話を切った。

「ミク姉のソフトで曲を作らせて、ニコニコ動画に投稿させる。で、ポコポコに叩いてミュージシャンになる夢をあきらめさせる、そういう作戦？」

ミクはニツと笑った。

「そ。パソコンのIPアドレスは分かってるから、ニコニコでもピアップロでも投稿すれば調べがつくわよ。さ、ここでもできることは終わったわ。札幌に帰るわよ」

ミクがアパートを背にして歩き出す。レンも慌てて後を追った。

さすがに帰りにへりは使わない。駅のベンチで特急列車スーパー北斗の到着を待つ。

事が全て順調に進んだのでミクは上機嫌だが、振り回されたレンはくたくたに疲れてしまった。

ホームは涼しい風が吹いている。レンは風の心地良さに救われる思いがした。

ふと横を見ると、ミクがスイカを品定めするような顔でレンを見つめていた。

「何だよ、その顔…。何か言いたいのか？」

「レン、あなた男のくせに今回の件何にも役に立たなかったわね。リンよりは使えるかと思って連れてきたのに」

あんまりな言われように、レンは口をパクパクさせた。とっさに言葉が出ない。

「…ミ、ミク姉が無茶すぎんだよ！ボクにへりの操縦士脅したりハッキングの手伝いしろって言うの！？」

憤慨しているレンを気にする風もなく、ミクはまた携帯をいじりだした。

「いざというとき頼れる男じゃないとモテないよ。まあレンはまだ十四歳だし、これからね」

レンは言い返そうとしたが、ミクが携帯で話し出したので、何も言えなかった。

「あ、もしもし、死球P？ ミクよ」

死球PはメジャーでCDも出している有名Pなのだが、削除覚悟で卑猥な歌詞の曲を歌わせることが多く、ミクは嫌っている。

「元気じゃないのよ。用があって電話してるんだから、今からあたしが言うこと耳の穴かっぽじってよく聞きなさい」

有名Pの中で唯一死球Pにだけ、ミクは敬語を使わない。

「今から三時間以内に、北斗製菓のネギ煎餅のCMソングを作りなさい。あたしとレンのデュエットよ。……あたしの話聞してるの？ メモしなさいよ。ホ・ク・ト・セ・イ・カ・ノ・ネ・ギ・セ・ン・ベ・イ。何それって？ ググレカス。今何時よ？ 三時？ 六時にはあんたの家着くからね。それまでにできてなかったら二度とあんなの曲歌わないから。一度聞いたら耳から離れないような、キャッチーなやつよ。分かったわね」

電話の向こうから何か叫ぶ声が聞こえたが、ミクは構わず切った。

「死球Pの家に着くのは七時ごろね。一時間猶予を上げるなんて、あたしって何て優しいのかしら。レン、もう一仕事付き合ってね」  
疲れ果てたレンは、ダリの描く時計のようにぐにやりとベンチにもたれている。

「レン、頑張つてよ。鶴田社長のためだと思って」

ミク姉の煎餅のためでしょ……。疲れたので突っ込むのもやめ、レンはハリーと生返事をした。

二週間後、ニコニコ動画に正史の作った曲が投稿された。P名は三毛犬Pと訳の分からない名前だった。

投稿に気付いたミクとレンは、早速けなしてやろうと勇んで動画を再生したが、すでに気の毒になるほど酷評されていた。

三毛犬Pは一度では懲りず、その後三日おきに二曲を投稿したが、同じようにボロクソに扱き下ろされた。それを最後に、三毛犬Pの投稿は途絶えた。

煎餅騒動から二ヶ月後、ミクたちのマンションに人が入れるほど大きなダンボールが届いた。北斗製菓からだ。

中にはネギ煎餅がギッシリと入っていて、ミクは幸せのあまり卒倒しそうになった。

白い封筒の手紙も一緒に入っていた。

宛名も中の便箋も毛筆で書かれている。驚くほどの達筆で、こんな手紙をもらったことのないミクはそれだけで感激した。

達筆すぎて読めない字があるので、ルカに朗読してもらうことにした。  
リビングにレンとリンも集まり、テーブルを囲んだ。ルカがゆっくりと手紙を読み上げる。

拝啓

雪も溶け日毎に春の訪れが感じられるようになりました。

初音ミク様も変わらずお元気なこととお慶び申し上げます。

先だつては弊社を倒産の危機から救っていただき、誠にありがとうございます。  
ございました。

おかげさまで新しい問屋との契約もでき、気持ちを新たにして製造に励んでおります。

また、初音様に作っていただいたネギ煎餅のCMソングが大変好評で、

土産物屋での販売が急増しているだけでなく、道外からの問い合わせも殺到しております。

生産が追いつかず、嬉しい悲鳴を上げているところです。

初音様にお借りしたお金ですが、危機を乗り切ればすぐにでも返そうと思っていたのですが、

今後も好調な売れ行きが続くと予想されますので、初音様のご好意に甘えることになりましたが、

工場の設備増強に使わせていただきたいと思います。

向こう三年を目処に、必ず返済いたしますので、ご無理をお許しください。

一つご報告がありまして、長男の正史がアパートを引き払い実家に帰ってまいりました。

本人は目が覚めたと言って、今は煎餅作りに一心不乱に打ち込んでおります。

元々ものを作るのが好きな性格ですので、水を得た魚のように仕事を楽しんでいます。

跡取りもでき、北斗製菓は今後も末永く皆様にご愛顧いただけたら幸いです。

この年になってからこんなにも良いことに恵まれることがあるものかと、

家内と二人幸せを噛みしめております。

初音様への感謝は言葉では言い尽くせず、ご恩の返しようもございませんが、

精一杯ネギ煎餅の製造に打ち込むことで、少しでもご恩に報いたいと思います。

重ねて心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

敬具

手紙を読み終わってから、ルカは慈しむように文面を眺めている。一番涙腺のゆるいリンは、途中からうるうるして聞いていた。ミクも目じりの涙を拭っている。

「ぐすつ。ミク姉、１０００万円貸したって聞いたときはアホかと思っただけ、いいことしたねえ」

ティッシュで涙を拭いながらリンが言った。

「本当ね。わたしもキャッシュカード取り上げようかと思っただけ。ミク、偉いわ」

「何よ、リンもルカも。あたしが北斗から帰ってきたときはしこたま怒ったくせに」

ミクがふくれる。その通りで、ミクはあの後ルカにたっぷり油を絞られ、リンにまで散々叱られたのだ。

「まあまあ、ミク姉。怒ってないでさ、ネギ煎餅食べようよ」

レンが場をとりなす。そうねと言って、ルカが茶を入れてきた。みんなでネギ煎餅をポリポリと齧る。

「あー、もう。このネギの香りが何ともいえない…」

ミクが目を閉じて幸せそうな顔をする。

「ねえ、ネギ煎餅の曲歌ってよ」

リンがリクエストする。ミクとレンは声を合わせて歌った。

「北斗の〜風を思い出すのよ、この・香り・ネーギせんべ〜」

明るいメロディーにネギ煎餅を賛美する歌詞が絶妙に乗る。

「ノリのいい曲よね。死球P、これ三時間で作ったんでしょ？」とルカ。

「ミク姉とレンが着いたとき、死球P、目が血走ってたらしいよ。神が降りてきたと言った」

死球Pが凄まじい集中力を発揮して作った歌は、一度聴くと病みつきになってしまうのだった。

そつ、まるで、北斗製菓のネギ煎餅のように。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5332ba/>

---

【VOCALOID】初音ミクの再建 ～ネギ煎餅の北斗製菓を救え～

2012年1月14日19時46分発行